

第2学年図工科における「意味と内容」のひろがり

2年A組 竹中 恵美子

題材『さわって かわって』～こむぎこへんしんものがたり～

の学習を通して

1. 子どもに対するねがいと学習指導のねらい

私たちにとって、自分が表したいことやものをいちばんに理解し、それを実現しようとはたらいてくれるもの、それは自分自身の感覚である。また、外から受ける刺激やものの感じをいちばんに伝えてくれるものも自分自身の感覚である。子どもたちはそのことに気づいているだろうか。そして、自分の持っている感覚をどれだけはたらかせているだろうか。

そこで、私は、対象とよくかかわり、自分らしい表現を生み出していく図画工作科で、持てる力のひとつである、直接的な感覚を大切にしたいと考えた。なかでも、五感のうちの視覚と触覚をとりあげて述べる。この二つ、「見る」と「さわる」ことはつながっている感覚である。子どもたちは、両感覚を相互にはたらかせ、対象への理解を深めていく。さわりながら見たり、見ながらさわったりして、その対象への見方、感じ方を構築していくのである。もちろん、この二つの感覚だけではない。これら以外の聴覚や嗅覚、味覚など、すべての感覚をはたらかせて対象にかかわっている。しかし、これらの感覚の中でも、その対象への理解を、子どもたちは、視覚である「見る」ことに頼る傾向がある。その対象に「さわる」ことなく、その大きさや質感を想像したり、すべてを把握できたように感じたりすることも多い。そのようなときは、「見る」ことをほかの感覚よりも優位にはたらかせている。例えば、机の上にある土ねんどのかたまりをみたとき、「やわらかそう」「なにかつくれそう」と想像するかもしれない。しかし本当は、それは落としたり割れるほど硬く固まっているかもしれないし、表面と中の様子が違うかもしれないのである。つまり、見ただけでは正しい判断ができない、手にとってみないとわからないのである。

子どもは、直接触れたり、体ごとにはたらきかけたりしながら、ものの意味をわかろうとする。それまでの経験や知識をもとにした、自分なりの受け止め方で感じ取ったり、新しい受け止め方をみつけながら感じ取ったりしていく。体全体の感覚をはたらかせる造形活動は、低学年の子どもたちにとって重要な学習であり、それらを積み重ねることは経験となって、後の表現活動に活かされる。感覚を研ぎ澄まし、身体感覚を意味や言葉より優先させる機会を持つことは、より一層ものの理解の範囲をひろげることにつながるだろう。そこから生まれる見方や感じ方、表現方法はその先の造形活動の基礎となっていくのである。そこで今回は、直接的、身体的な感覚である「さわる」ということを軸にした学習を提案したいと考えた。

また、今年度の私の研究テーマを、“自分らしい見方や感じ方をみつける”～自分と「もの」、自分と「ひと」との関係を通じて～とし、学級で取り組んできた。これは、ものやひとへの自分らしい見方、感じ方をさがしたり、新しい見方、感じ方をみつけたりすることを願ってすすめているもので、五感で感じる活動を子どもたちの興味・関心、思いや問いに沿って取り入れている。この題材は子どもたちにとって、そのような視点からも意味を持ち、子どもたちの学びをひろげられるのではないかと考えた。

2. 2年生の子どもがとらえた「意味と内容」

本題材を通して子どもたちがひろげていく「意味と内容」を造形の「素材」と「活動」の二点をねらいとし、考察する。

◇「素材」における学び

子どもたちの見方、感じ方をひろげるのにふさわしいものであり、手で「さわる」ことによって学びをひろげることができるものであるといった観点から、素材を小麦粉とした。小麦粉のもつ特性は周知の通りであるが、小麦粉は、その様態の変化に魅力のあるものである。そのままの状態であれば、“さらさら”“ふわふわ”としており、水を加えると少しずつ“ぼろぼろ”“ころころ”していき、もっと水を加えると粘性が出てきて“ねちょねちょ”“どろどろ”となり、さらに加えると、“とろとろ”“しゃぶしゃぶ”と変わっていく。これらの言葉は、小麦粉の様態の変化を言葉で表現する際に、子どもたちから自然に出てきた言葉である。

このように、小麦粉に手を加えたことでその様態が変化し、そこから子どもたちが受ける感覚やイメージを言葉に置き換えることは、子どもたちの表現のよりどころとなったり、次の活動への方向付けとなったりする。それらの活動を繰り返し、行きつ戻りつしながら、表現活動をすすめていってほしいと考えた。身体感覚のみの学びではなく、言葉と感覚を結びつけ、そこからさらに思いや表現をふくらませる力を身につけることが、この題材を通しての素材における学びであると考えて行った。



◇「活動」における学び

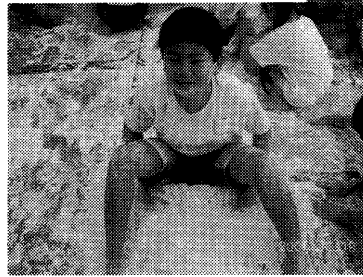
手や体全体をはたらかせる活動の過程を楽しむこと、発想したことをもとに思いのままに活動を進めることは、低学年の造形あそびに欠かせない要素である。そして、この時期の子どもたちは対象にはたらきかけ、かかわること自体を楽しむ傾向がある。子どもたちは、自分の追求したい表現や活動を思いついたり、試したりする中で、それらをより一層自分のイメージに近づけるために、必要な補助材料や道具を探したり使ったりし、それが自分で解決できないときは要求を出してくる。題材を通して得た認識から、派生してくる様々な表現活動が学びであると考えている。



3. 「意味と内容」がひろがる場面

(1) 言葉と感覚が連動した表現

場面1は小麦粉の上に「ドシン」と座って、型をとったものである。はじめは、小麦粉を「ぎゅうぎゅう」と足で踏んだり、手で握ったりして、そこから受ける感覚を楽しんでいたが、手や足のよな体の小さな面だけでなく、だんだんと体の大きな面を使うようになっていった。そして、表現するものも大きくなっていき、右の写真のようなベッドをつくっていった。この表現のために、一度、その場に寝転んで、体の大きさの見当をつけたり、頭や腰など、寝たときにどのあたりにくるかを想定したりして、盛り上げる高さや幅を工夫してつくっていった。そして、土台部分はしっかり「ポンポン」と固めながら、寝たときに体に触れる上の部分は最後に「ふわり」と粉をかけるようにして、出来上がったベッドに寝た瞬間「ふわふわ〜」という言葉がこぼれていた。



場面1

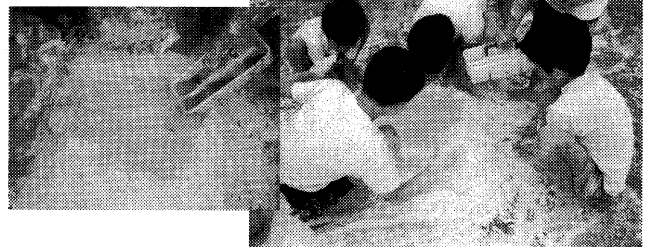


このように、言葉と感覚、表現が絡み合いながらすすめていく活動がみられた。言葉が表現の拠りどころとなったり、自分の表現を置き換えるものとして使われたりすることで、子どもの表現が意欲の高まりとともに、ひろがっていく場面である。

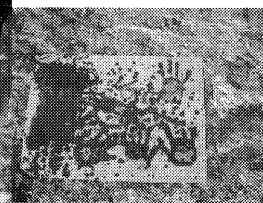
(2) 活動から派生する表現

場面2は、小麦粉を砂のように扱い、砦のような形をつくり、そこへ水色に色をつけた水を注ぎ込み、「池」と見立てたものである。この活動は、はじめに「山」をつくり、そこに穴を通してトンネルをつくるということからスタートしたものであった。そして、自分たちの表現したいものがだんだんはっきりとしていき、水を流し込むことを思い付き、その水に色をつけようと、絵の具やパレット、水入れを用意するなどして活動がすすんでいった。

場面2 ↓ →



← 場面3 ↓



場面3でも、小麦粉と水を少しずつ混ぜてこねたり、水の量によって変わる感じを楽しんだりするうちに、そこに色をつけることを思い付き、絵の具をダイナミックに入れて、混ぜ合わせ、次々と違う色を注ぎ込むにつれて、変化する色や質感を味わっていった。また、そうしてできた小麦粉絵の具で、色画用紙に手で描くなどといった絵画的な表現にも

発展していった。

このように自分たちの表したい表現を進めるために必要な補助材料や道具を思いつき、自ら探したり、それが見つからないときは教師に相談しに來たりする。思いのままに表現をしようとする中で、子どもたちが自然と身につけていく学びの姿であるといえる。

(3) 素材の魅力から生まれる表現

小麦粉の魅力は、2. の素材における学びでも挙げたが、こちらが意図的に変化させると様々な姿を見せてくれるものであるが、それと同時に、小麦粉自身が時間とともに変化していくという大きな魅力もある。この題材は全7時間の計画で、期間でいうと2週間にわたるものである。よって、子どもたちが活動をしていないときにも小麦粉は変化していく。

少し水をふくんだものは、時間が経つと「ねとねと」から「ぱりぱり」と変わっていったりする。場面4は、そんな小麦粉の自らの変化をとらえて、活動を進めた子どもたちの様子である。

場面4



「ぱりぱり」になった小麦粉をざるに集め、少しずつふるいにかけていく。手でこすり合わせたり、指でざるの網目におしついたりして、粉の状態に戻していくのである。そうしてきたものを、子どもたちは嬉しそうに「もとのすがたにまたへんしんしたよ。」といって型に入れ、活動していた。

このように、素材がもつ魅力からも子どもたちの表現や活動がひろがる。～こむぎこへんしんものがたり～とは、子どもたちの表現によってつくられるものでもあり、また、小麦粉が自然にへんしんしていく姿から発想して表現していくものでもある。場面4は、自らはたらきかける変化だけを楽しむのではなく、小麦粉のもつ特性を活かして表現した場面であるといえるだろう。

4. 成果と課題

本題材の中で、子どもたちは自分の思いのままにのびのびと活動し、表現をふくらませていった。その中に、これまでで述べてきたように、新しく小麦粉に対するイメージをもったり、今まで持っていたイメージをつくりかえたりする姿があった。また、日常的には出合うことのない小麦粉の量(100kg)を目の前にし、からだいっぱい感覚をはたらかせてかかわることで、子どもたちの活動意欲を大きく引き出すことができた。

しかし、題材や素材によって、子どもたちの学びのひろがりをもたせることができるかどうかが決まるといっても過言ではない。今回の素材の小麦粉は造形の素材としてとても奥の深いものであったことから、改めて題材や素材えらびの重要性を感じた。今後も、子どもの発達段階を大切にしながら、子どもの世界がひろがり、表現意欲が高まるような題材・素材の研究をすすめていきたいと考えている。